みなみっ子

２３号

令和７年１１月１７日(月)
南城市立大里南小学校
文責　校長　與儀　毅

学校教育目標　〇かしこく　〇やさしく　〇たくましく

今学校でチャレンジしている授業改善について

私たち学校では文部科学省が示す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んでいます。子どもたちの発達の段階に応じて学年で異なる部分もありますが、大体のイメージとして、個人で課題に取り組む場面、ペアやグループで取り組む場面、学級全体で取り組む場面を授業の中に効果的に取り入れます。従来学校で行われていた、教師が説明をして個々で取り組むような授業とは大きく異なります。

日本社会が高度経済成長の時期は、与えられた指示を的確にこなすことができることが求められていました。そのような時代は学校での授業も、教師の指示を黙って聞き、素早く取り組むことが評価されていました。教師もできる限り分かりやすく子どもたちに伝えることに力を入れ、授業改善の視点も「いかにわかりやすい授業」を作るかというものが多くありました。多くの考えとして、いい授業の作り手は教師であり、子どもたちはそれを授かる受動的な立場の存在でした。

現在、社会も大きく変化し、これまで同様の授業では、子どもたちの力を高めることが難しくなってきました。もちろん昔から変わらない部分、不易な部分もあります。最低限身につける知識・技能はあります。しかしその知識・技能も、ただ知っているだけの断片的知識、クイズに答えるような知識などは必要性は低いです。

変化の激しい世の中では、今日の常識が明日には非常識となることもあります。身につけた知識をつなげ、そこから新しいものを創り出すことも求められています。そのような力をつける授業は、このような授業であるという答えはありません。私たち教師も子どもたちとともに創り出す主体とならなければいけません。これから日々の授業を子どもたちが主体となるよう、まず私たち教師が主体となって取り組んでいきたいと思います。

上の写真にある6年生の国語の授業、そして１年生の算数の授業は、私たちが挑戦している授業の具体的な姿です。6 年生は、教科書やその他の図書資料、タブレットを使ってインターネット上の資料を活用してグループの考えをまとめています。また、１ 年生は、教科書やノートを使っての学習に加え、具体物を使って量について考える、グループで考えを出し合う授業を行っています。

受け身の子は、「誰かが教えてくれるだろう」「先生の教え方が悪い」などと考え、自分自身が学習の当事者であることを忘れています。一方教師・大人も「学ばない子どもに課題がある」「学べる条件は整っているのにそれを選ばない子に課題がある」など他人に責任を転嫁しがちです。学習の主体は子どもです。教師・大人は教育の主体です。少し難しい表現になっていますが、子どもも教師、大人も他人事ではなく、自分自身が当事者である意識をしっかり持つことが大切だと思います。

スマホを見ている時間はどれくらい？

子どもたち（私たち大人も）は家でどれくらいの時間、スマホ、タブレット、ゲーム、テレビなどに時間を使っていますか？YouTube やゲームは、見る人、行う人の関心を引くように作られています。なんとなく使っているとあっと間に時間が過ぎていきます。時間がもったいないし、結果として受け身の人になりますよ。時間を決めて使用したいですね!!